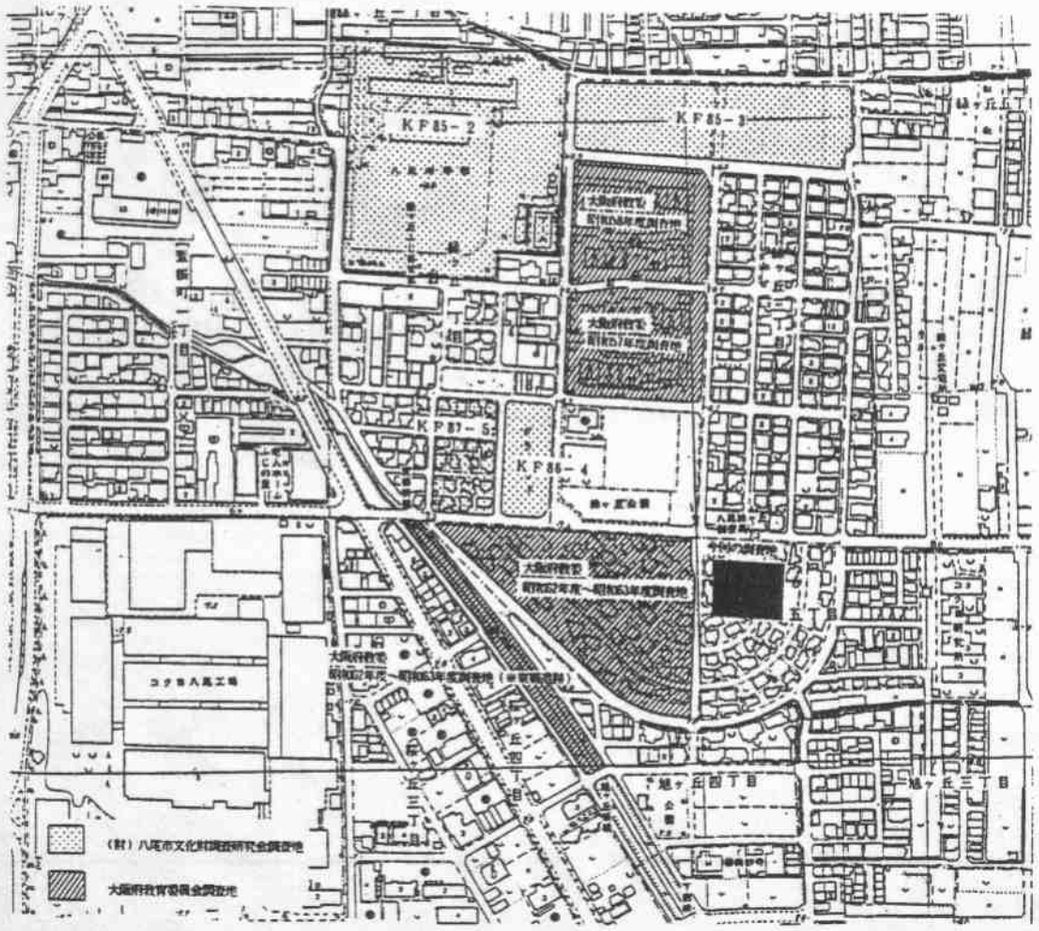
萱振遺跡第12次発掘調査現地説明会資料

1992年5月30日（土）P.M1:00～3:00

・調査場所　八尾市旭ケ丘５丁目85番地
・調査面積　2000m²
・調査期間　平成４年２月10日～６月６日
・調査主体　（財）八尾市文化財調査研究会

●はじめに

萱振遺跡は、八尾市中央部の桜ケ丘４丁目・旭ケ丘５丁目から北は東大阪市と市域を接する泉町３丁目・幸町６丁目にかけて、東西0.5～0.9Km南北２Kmの範囲に広がる弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡です。今回の調査地である旭ケ丘５丁目は、遺跡範囲の南部に位置し、地理的には楠根川右岸の現標高７ｍ前後の低位沖積地にあたります。



調査地周辺図（Ｓ＝１/50000）

この地域一帯では、昭和57年以降、府営住宅や市営住宅の建て替えに伴う発掘調査が、大阪府教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会により実施され、弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物がみつかっています。なかでも、古墳時代の前期と後期においては、居住域と墓域の関係が比較的明確で、平野に位置する古墳を考えるうえで重要な資料を提供しています。

今回の発掘調査は、仮称八尾市生涯学習センター建設工事に先立って（財）八尾市文化財調査研究会が平成４年２月10日から実施しているものです。

●調査概要

今回の調査では、３面（第１調査面～第３調査面）にわたる調査を実施しています。今回、現地説明会を行いますのは、第３調査面です。

・第１調査面【江戸時代中期以降】

第１調査面は現地表下0.8m（標高6.5m）の地点で江戸時代中期以降の井戸４基・溝２条のほか、粘土採掘坑が28基みつかっています。

・第２調査面【飛鳥時代・鎌倉時代～室町時代】

第２調査面は第１調査面からさらに約0.3m下げた面（標高6.2m）で、飛鳥時代の溝１条と土坑５基、鎌倉時代から室町時代の溝48条が見つかりました。 鎌倉時代から室町時代の溝は、小規模なもので農耕に伴う唐鋤溝と考えられます。飛鳥時代の溝は幅1.5 m、深さ0.3mを測るもので、ここから 土馬がみつかりました。

今回出土した土馬は、脚と尾が欠けていますが、現状で体長21ｃｍ、総高7.6ｃｍ を測るもので、土馬の中では大型のものです。土馬は、飾り馬で轡・手綱・胸繋・鞍・尻繋等の馬具が写実的に表現されています。

土馬実測図

・第３調査面【古墳時代前期（布留式期）】

第３調査面は第２調査面からさらに約0.2m下げた面（標高6.0m）で、古墳時代前期（布留式期）の方墳２基、井戸２基（ＳＥ－301～ＳＥ－302）、竪穴住居１棟（ＳＩ－301）、土坑11基（ＳＫ－301～ＳＫ－311）、溝７条（ＳＤ－301～ＳＤ－307）、小穴13個（ＳＰ－１～ＳＰ－13）を検出しました。そのうちの主な遺構について概説します。

方墳１

調査区の北西隅で見つかりました。北部および西部が調査区外のため全容は不明です。検出部分で東西長9.5m、南北長6.5mを測ります。周溝は幅1.5m、深さ0.7mで、周溝底には炭を含む黒色の粘土層がレンズ状に堆積しており、古墳が築造された後、帯水状態であったことを示しています。遺物は周溝内から壺の破片が出土しています。主体部は削平を受けており、その痕跡も残していません。

方墳２

やや東西方向に長い方形を呈するもので、東西長14m、南北長13mを測ります。周溝は幅１～1.5m、深さ0.2mを測るもので、全周せず、北周溝で２ケ所途切れる部分があります。遺物は特に、周溝の南西隅に小型壺・甕が集中して出土しています。主体部は方墳１と同様、後世の削平のため残っていません。

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－301

上面の形が円形を呈するもので、径2.0m、深さ1.35mを測ります。内部からは壺・甕・鉢・高杯・鼓形器台等が多量出土しています。

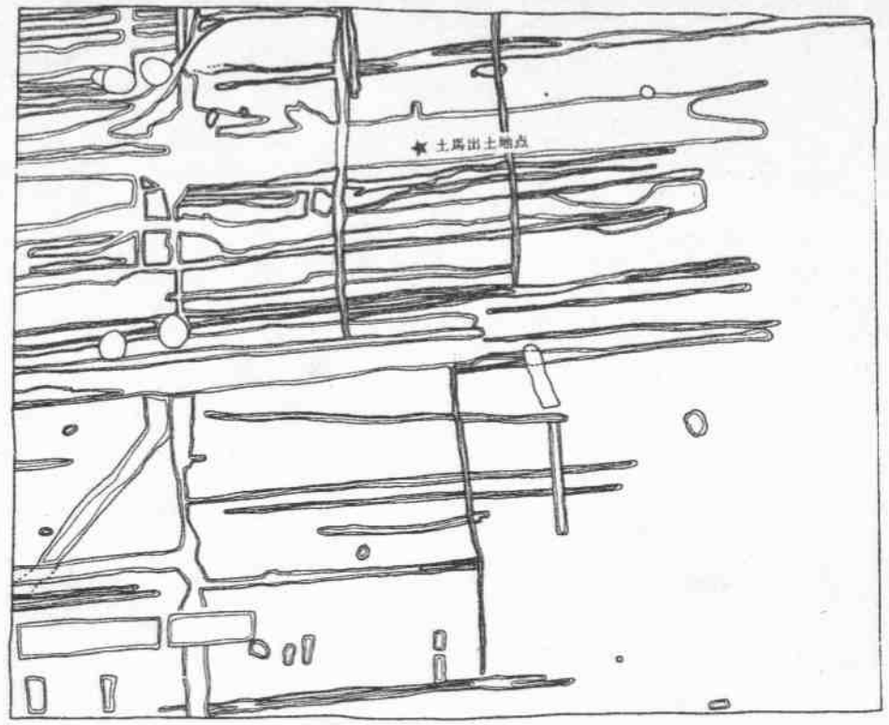
ＳＥ－302

木製の井戸枠を持つもので、上面の形状は土圧を受けたためか楕円形に歪んでいます。規模は、東西幅1.15m　南北幅0.55m、深さ0.6mを測ります。内部からは、壺・甕 の小破片のほか、加工を施した木材等が出土しています。

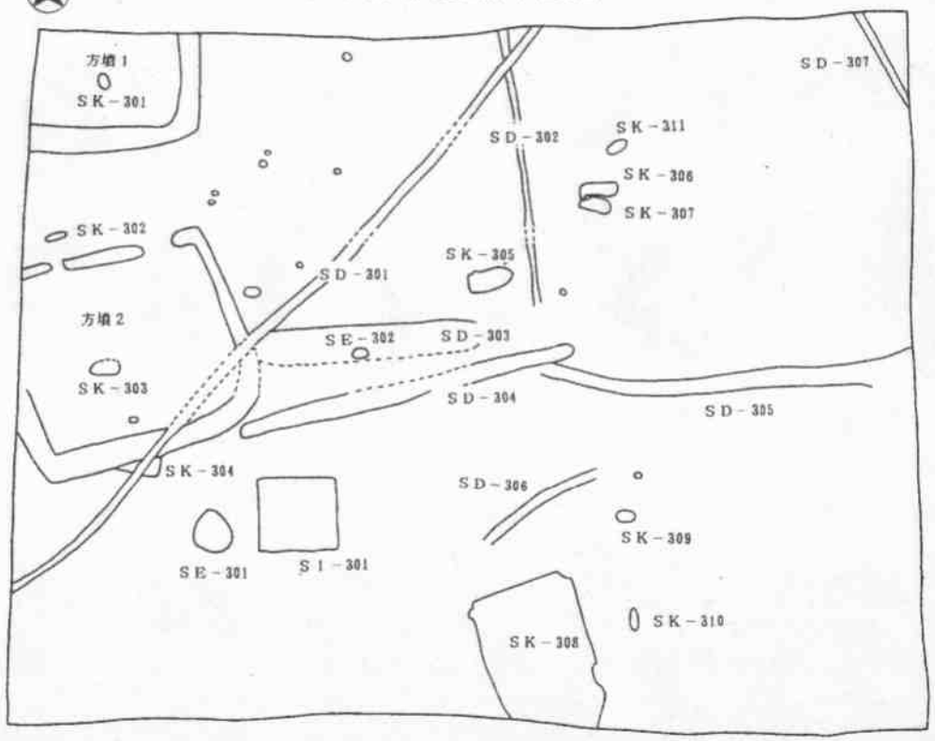
竪穴住居（ＳＩ）

ＳＩ－301

上面の形が方形を呈するもので、東西幅4.5m、南北幅5.0m、深さ0.2mを測ります。 主柱である４本柱の位置が他の竪穴住居に比べて、やや外側に設置されています。住居の床面付近から、壺・甕・高杯等の小破片が多量に出土しています。



第２調査面検出遺構平面図



第３調査面検出遺構平面図

0　20m

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－308

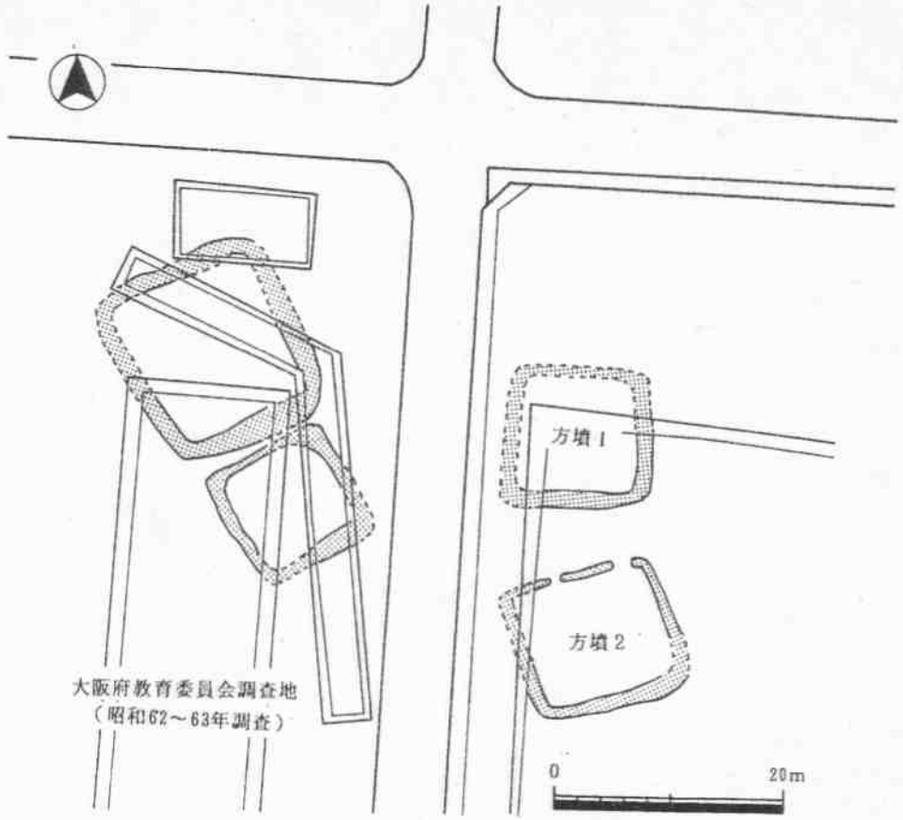
上面の形が方形を呈する大型の土坑です。 東西幅4.35～6.15m、南北幅9.3m以上、深さ0.5mを測ります。 断面の形状は船底状で、底部に炭化物・炭等が堆積しています。遺物は底部および斜面を中心に多量の土器が出土しています。

●まとめ

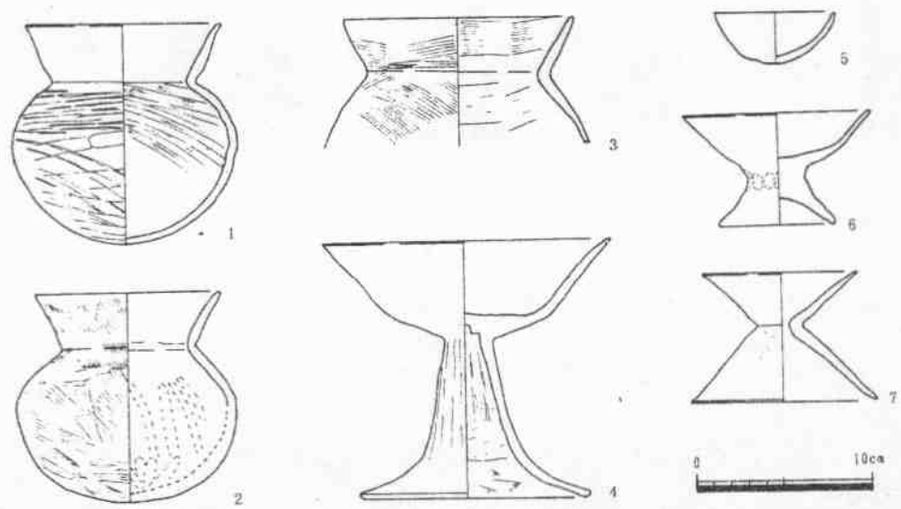
今回の調査では、３面にわたる調査を実施した結果、古墳時代前期から近世にいたる遺構・遺物が発見され、萱振遺跡南部の様相を知るうえで貴重な資料が得られています。

第２調査面の飛鳥時代の溝から出土した土馬は、八尾市域では太子堂遺跡・矢作遺跡・成法寺遺跡に次ぐ４例目で、最古に位置づけられるものです。土馬は、古墳・河川・溝・井戸・池等で発見されています。古墳から出土したものを除けば、何らかの形で水とのかかわりの深い地点から出土しています。以上のことから、水霊信仰に係わる雨乞いや止雨などの祭りに、神への捧げ物として生馬の代わりに土馬が使用されたものと考えられています。

第３調査面では、古墳時代前期（布留式期）の居住域と墓域が接近するかたちで発見されましたが、土器を検討した結果、この時期に居住域から墓域に移行したことが判りました。 古墳については、今回検出した２基と調査区の西側で大阪府教育委員会が実施された調査で見つかった２基の方墳を含めて、調査区の北西部一帯に４基の方墳が存在したことが判りました。今回の調査のように、「埋もれていた古墳」が平野部の発掘調査で見つかる例が増加しています。発見された古墳の中で古墳時代前期（布留式期）のものと比較すれば、墳丘の形状では、一部に前方後方墳がありますが、方墳が主流であったようです。方墳の規模では、萱振１号墳が大型で一辺27mを測りますが、そのほかのものは６～13m程度のものです。また、久宝寺古墳（北亀井町３丁目）・萱振１号墳（萱振町７丁目）・美園古墳（美園町４丁目）のように埴輪を持つ古墳と今回検出した古墳のように、埴輪を持たない古墳があり、これらの古墳の有りかた追求することが今後の課題と言えます。



古墳分布概略図



ＳＥ－301出土遺物実測図　壺（１・２）、甕（３）、高杯（４）、鉢（５）、小型台付き鉢（６）、鼓形器台（７）